

奏の幕が明けられた。

先づ主催者を代表して小野鶴彦師の挨拶、続いて三明寺住職が歓迎の辞を述べられ、参加琵琶人全員の合奏で松野紫雲先生作「弁財天」を奉納後、石川昌評氏の司会により抽籤順にて演奏を始める。児島高德(佐野智)、石童丸(小林残水)、七郷落(平井衣子、才田明美)、似我(染谷晃岳)、平野の峯(河西凛衛)、城山(須田誠舟)、遠州灘をゆく(小野ひろみ)、旅順懐古(平井春嶺)、コラサ二号(山木岳盛)、台湾入(若林鶴山)、小敦盛(八束一峰)、金剛石(平井幸生)、新撰組(加藤邁水)、西郷隆盛(根木貞水)、形見の桜(鈴木鶴岡)、小督(岡尾鶴城)、桜(柏木曾道)、桶狭間(松永城栄)、禅海(田中訴水)、鉢の木(遠藤鶴東)、桶狭間(山田叢雲)、いのちの戯れ歌(山本嶺舟)、乃木大将の歌(仲川秀邦)。以上で第一日を終了、記念撮影後約七百米離れた妙徳寺へ三々五々、台風六号の影響による雨の中を移動する。こゝは流石に立派な建物で、入浴後百畳敷の大広間に於て夕食、ユイモアをたっぷり自己紹介で腹の皮をよじらせ或は寄せ書きをし、門限の九時まで街を散策した一部の方を除き寝につく。

翌三十日は五時起床、朝の勤行の座に列なり、心身を浄めて朝食後寺内を参観、断続的に降る雨の合間を見て記念撮影後、弾奏会場の三明寺に再び移動し、第二日目の弾奏を開始する。弁財天(矢吹華水)、桜花詩(鈴木和歌子)、小督(伊勢谷安江)、城山(伊吹正陽)、彰義隊(伴野鶴風)、弁の内侍(岡部錦蝶)、迷語もどき(青島晃苑)、花紅葉(小野鶴彦)、城山(清川嵐舟)、吉野山懐古(三上晃城)、富士山(大石晃月)、新羅

三郎(栗本天芳)、国船(須部修二)、衣川(梅原旭濤)、弾法(辻靖剛)、秋(杉本治作)、物狂(古家絃風)、菅公(柿沢實峰)、龍の口(木村維水)、城山の月(石川昌評)、岩崎谷(長谷川博章)。以上を以て十一時四十五分予定通り全部終演、昼食後来夏を約して二時半現地で解散し一泊会を閉幕した。この二日間琵琶一筋に結ばれた関東、中部、関西の琵琶人、小野鶴彦師並びに門下の方々の献身的な奉仕により終始和気藹々、日頃練磨の発表を行ってお互い参考となる点多く、且懇親を深めたのは誠に結構な事であった。

武蔵会。一水会多摩 七月二十五日午後支部合同研修会 一時小金井市福祉会館で開催。当日は突発事故等のため常連の欠席者が多く些か淋しかった。六時閉会。白虎隊一呉究静軒、本能寺一富田晴朋、横笛一加藤喜水、伊豆の御難一伊藤馨水、舟弁慶一中村修水、元寇一清水環水、王昭君一大村鼓城、千曲川一杉山旗水

日本琵琶振興会 七月二十二日午後一時月例親睦研究会 東京新宿洲鳳会館。鈴木流泉氏会長の本会は従来の単なる集いの域を脱して今回から新しい構想の元に発足する事になった(詳細後報)。横笛一出口石水、薩摩守一緒方晴舟、修善寺物語一杉山雅春、大楠公一佐藤旭天紅、渡し守甚兵衛一西村錦風、大高源吾一木原綾子、吟詠一中村菊鶴、山田洲鳳、井上雅翔、望月啞江。八時閉会。

京都琵琶協会で恒例京都琵琶協会の首記演奏会を七月二十三日午後六時から八坂神社本殿前能楽堂で開

催した。今夏は一ヶ月近くも降雨を見ず、連日三十六度を超える猛暑の中を奉納者は元一杯の熱演で、開始前から陸続参集の愛好者を喜ばせた。終了後例年の通り神社から頂いた神酒で乾盃して十時散会した。(献奏者)渡辺濤秀一白虎隊、加藤旭松一本能寺、古谷寛水一赤垣源蔵、木村維水一彰義隊、相良旭輝一川中島、富岡旭雄一秋風故郷山、矢吹華水一田中鶴水、戸田旭公一掛合日山号、山本嶺舟一吉野落(上)、平井春嶺一同(下)、戸田旭公一堅田落(上)、梅原旭濤一同(下)。

京都琵琶協会九月定例茶話会 九月八日(土)午後一時京都市北区平野宮西町六四(一)平井春嶺氏宅(電話四六二一、一四二二三番) ○京都琵琶協会秋季演奏大会 九月二十三日(日)正午京都河原町広小路の府立文化芸術会館に於て目下NDR放映中の「戦国盗り物語」に關係の曲のみを選定し全會員の外東西の名手をゲストに迎え協会創立二十五周年記念として大々的に開催。

○日本琵琶振興会九月定例会 九月二十三日(日)午後一時東京新宿洲鳳会館 ○浅野晴風会秋季演奏大会 十月十四日(日)昼東京中野区公会堂、名手四氏ゲスト出演 ○三浦蓮水会秋季演奏大会 十月二十八日(日)昼西宮公民館松下ホール(詳細後報)

昭和四十八年九月一日発行(非売品) 編集者 植村 真 水 発行所 京 絃 社 569 高槻市津之江北町一ノ二二三 電話〇七二六(八五)六〇五一番

琵琶 機関紙

京 絃

第二三一号 京 絃 社

狂 醉 亭 漫 録 (第九十三)

吉 良 邸 の 絵 図 面

古 谷 寛 水



本年の暑さは特に厳しく京都では連日三十六度以上という猛暑で、まだ残暑も厳しいので今回は少々碎けた話をご紹介する。

吉良上野介邸へ討入を敢行するに就ては、其の絵図面を入手して作戦計画を立てる必要あり、大石内蔵助が入手した事は確実であるが其の経路に就ては何等史実は伝わらない。然し俗説として二・三伝わって居り、

第一は、赤穂浪士某の妻がスハイの目的で吉良邸の腰元として仕え、好色の吉良が之を口説いたので常盤御前の故智にならい、操を捨て、忠節を全うすべく吉良の要求に従い、隙を覗って絵図面を盗み出し大石に届ける筋。第二は、先に本稿で紹介した赤穂浪人上りで当時江戸で骨董を扱う豪商鑄屋宗伴が、新築後の吉良邸へ出入の間に、大石の旧恩を思い出し、見取図を渡したという話。

第三は、義士の二代目岡野金右衛門が、吉良邸を設計した大工頭梁の娘を色仕掛けてたぶらかし、絵図面を盗み出させて之を大石に

送るといふ、講談漫曲の「岡野絵図面取り」の一席であるが、之は比較的面白く出来ているので、今回はこの概略を記述する。

本所松坂町吉良邸裏門前に平野屋という酒屋が出来たが、主人は其妻赤穂浪士貝賀弥左衛門、帳付役の番頭は二代目岡野金右衛門で此人は本稿刀匠忠僕直助の項で紹介した岡野が赤穂開城後京都山科で病歿し、その伴九十九郎が二代目を襲名したその人であり、又御用聞きは神崎与五郎と間新六で、男ばかりの所帯であるため近所の娘らが遊びに来る。

その中で隣の所相生町御船蔵大工頭梁政右衛門の娘お花といひは、年は二八か二九からぬ、京で鴨川江戸ならば、多摩川の水に晒せし雪の肌という頗る美形で、三つばかりの異母弟に当る男の児を抱いてよく遊びに来るが、その度毎に岡野に対して妙な素振りをする。色濃き桃の唇に言葉に花の咲き出でて、匂いこぼる、春の風という風情だが岡野には一向応えない。主人貝賀が之に気付いて或日

岡野を一室に招き、実は毎日遊びに来るお花坊の事やが、先日もある娘の話に、お向うの吉良様の邸の絵図面は私の父様が引いたと申した。絵図は用算筒に在るとの事、明日おの娘が参つたら神崎と問は使に出す、手前はお花坊の連れて来る子供を連れて表へ出るから後は其処許のお手の内、女を欺すは武士の作法にあらざれど、恥を忍ぶもお主の為め、何とかうまく絵図面を手に入れて戴きたいと、申し入れる。岡野も、忠義の為めとあるなれば是非に及ばぬと承知する。

翌日も果してお花は遊びに来たので、手筈通りに運んで岡野とお花は二階へ上る。遠く近いは何とやら、女の方に十分下心がある事として岡野の如き石部金吉も遂に情が動き、二人は密の如き情交に溺れる事になり、一度が二度、二度が三度と重なりて、春の夜や親に話せぬ夢ばかり、という關係に陥る。

或日岡野はお花に向い、私の父は田舎で相当な暮しをしているが至って普請好き、聞けば向いの吉良様のご普請は中々立派との事、その絵図は其許の父様が引かれたと承る、何と私がその絵図面を書き写すまで貸しては呉れまいか、と頼むとお花は簡単に承知して今夜裏の木戸口まで忍んで来て下さいと云うので約束は成立する。

一方政右衛門の女房お熊は所謂継母根性でお花と岡野の關係に気付き亭主に告口する。政右衛門は、人もあろうに酒屋の小僧とくっ付くとは何事ぞ、と激怒し、お花の忍び出る

現場を取押えんため、其夜は一口飲んで早く就寝し狸寝入りしつゝ様子を覗く。お花も父様母様早く寝付いてくれないかと空寝入。狐と狸の欺し合い、夜は森々と更け渡る、何処で打つやら四つの鐘、お花はソツと起き出で、用筆筒から吉良邸の絵図を取り出し裏口へ出ようとするを、政右衛門ハツと跳ね起き娘に追い付き頸筋取って折檻し、お花の懐中から引出したものを、お熊の差出す手燭の灯で見れば叱驚、自分で引いた吉良の邸の絵図面に、何思いけん政右衛門、差し出すあかりをフツと吹き消す。女房お熊を遠ざけて、娘を裏庭に連れ出して政右衛門。

娘能う盗った感心な奴、吉良の邸の通用門のその前に、俄に出来た酒屋店、男ばかりの世帯と聞き、浅野浪士に違いないと、思うて居たに案の定、吉良様邸の絵図面を欲しがるからは、俺の想うた通りであろう、父のこと能く聞けよ、俺の兄貴は備前岡山池田様お大工頭梁樋口政兵衛、兄貴の云うにはこれ弟、此度浅野様お家断絶に就いて、大石内蔵助良雄という立派な方が居らるゝで、必ず仇討をするに相違はない、其の大石という人は元池田家から養子に行つたお方、俺は遠くに居る体、其方は江戸に居るを幸い、まさかの時の役に立ってやってくれと兄貴の頼み、それで態々浅草の蔵前から、この相生町まで移つて来たのも、まさかの時の役に立ちたいばかりの俺の考え、絵図は其方にやる程に、お目にはかゝらないが其のお方に、宜敷う云

うてくれるよう。それから娘、たった一言云うて置くが、其方も定めし初恋の、添いたかろりが夫りやならぬ、何故ならば、先方はお主の仇討ちという大望のある体、所詮此の世じゃ添われぬぞ、必ず未練な事云うな、もしや未練な事云へば、高が大工の娘じゃと、親の名前が直ぐ出るぞ、と教訓し、叔父の三右衛門方へ行くよう指図する。

忘れちゃすまぬ親の恩、情の水棹に愛の船、堰き来る胸の波しづめ、父さんさらばも口の中、裏手へ出づれば金右衛門、お花殿、委細の様子は此処にて聞いた、失礼乍ら貴女の父上は武士も及ばぬ立派な魂、何を隠さう我は浅野の浪人岡野金右衛門と申す者、此の世で添えぬ薄い縁、女を欺す憎い奴と、必ず思うて下さるな、死んで未練は女夫ぞと誓われ、お花もその一言が何より、と喜んで、兩人涙乍らに別れを告げる。

岡野は此絵図を川崎在平間村にある内蔵助に手渡す。お花は四十七士仇討後髪を剃して尼となり追善供養をしたという、これが岡野金右衛門絵図面取りの一席である。

此話には無論脚色も多いが大体に於て辻つまが合つて居り、否定する資料は無い。一夕話や伊呂波文庫にも類似の記載がある。

元禄十五年十月の神崎与五郎の一曲は此の事実を詠んだものと思われる。曰く

同志の者の恋初と見て時雨を
神無月しぐるゝ風は越ゆるとも
同じ色なるすゑの松山 (此項終)

うてくれるよう。それから娘、たった一言云うて置くが、其方も定めし初恋の、添いたかろりが夫りやならぬ、何故ならば、先方はお主の仇討ちという大望のある体、所詮此の世じゃ添われぬぞ、必ず未練な事云うな、もしや未練な事云へば、高が大工の娘じゃと、親の名前が直ぐ出るぞ、と教訓し、叔父の三右衛門方へ行くよう指図する。

忘れちゃすまぬ親の恩、情の水棹に愛の船、堰き来る胸の波しづめ、父さんさらばも口の中、裏手へ出づれば金右衛門、お花殿、委細の様子は此処にて聞いた、失礼乍ら貴女の父上は武士も及ばぬ立派な魂、何を隠さう我は浅野の浪人岡野金右衛門と申す者、此の世で添えぬ薄い縁、女を欺す憎い奴と、必ず思うて下さるな、死んで未練は女夫ぞと誓われ、お花もその一言が何より、と喜んで、兩人涙乍らに別れを告げる。

奏会で、私の出番の際ステージの壁には曲目の下に源絃嶺、と書いた紙が下げてあった。大体その頃の私は、森田城南或は源天頼と号していた。それを源絃嶺とは何たることかと、降壇々々その間違いを訓した処、絃風氏平然としてほゝ笑みながら、いゝじゃないかと、亦一座の連中も一様に、いゝでしようとい異口同音。

元来絃風氏の流は後日、中派宗家を名乗つたことでも明らかのように、その頃のいわゆる旧派と新派の中間をゆく型だったが、一般聴衆には新旧のいづれかをはっきりする方が好ましく、寧ろ旧派の方が受けのよい時代であった。それで私を絃嶺と名乗らせ、絃風氏の弟子である様に見せたいのが本音だった。

根が商人である氏は、宣伝の為に奇をてらう傾向も強く、或時絃風氏と私の他に二人の門弟らと共に、小石川の清水谷公園から関口台町方面の高台を散策の折、恐ろしい大型の黒門の前に佇んだ、門扉の片方だけで横巾優に五尺はあり、大名屋敷風の豪壮な邸宅である。門の中央の軒下にある表札を見上げれば、一尺五寸大の厚板に「薩摩」とだけ筆太に書いてある。その時絃風氏歎息して曰く、「ウム、薩摩という姓もあるんだなあ」と、氏はその時早くも薩摩絃風なる称号を胸に画いていたのであろう。

かくて程なく、薩摩絃風と改名の名乗りを掲げた、驚いたのは薩摩本場系の琵琶大家を初め、当時唯一の機関紙琵琶新聞の主筆者権

橋省亭氏等で、直ちにその傲慢不遜を詰つたが頭として肯んぜず、遂にそのまゝ押通してしまった。そして同時に中派宗家を布告した。氏は亦琵琶劇の創始者でもあった。思うに中派の宗家たらんには先づ人気第一と考へ、耳に訴える琵琶だけでなく、眼も楽しませる琵琶を構想を練つた揚句、錦心師が盛んに売出した石重丸を琵琶劇として、琵琶会上に演ずることを考へた。

妻君を荊薹に、娘を石重丸に仕立て、自分分は琵琶を演奏するという親子三人水入らずの舞台である。だが大目に見てまあまあと云うところだった。私はその頃から絃風氏の会に出演を好まぬようになった。

絃風氏には絃雨と号する弟があり、共に長唄をよくして或る長唄の会に属してあり、その演奏会に兄弟揃って出演したこともあった程だから、琵琶劇なる構想も不思議ではなかつたであらう。

絃雨君は亦太平洋画会に属して洋画を描いており、その関係で私との交遊は続いた。或る年暮も正月に近い頃、突然私の宿を訪ね来た彼は、私の書捨ての油画小品数点を選び出し、之は金になる、と持ち去つた儘春になつても音沙汰なし、どうした事かと杉並あたりだつたと思ふが彼の家を訪ねて見れば、実は販売役の建部君に渡したのだが、正月以来一度も顔を見せず気にかけているんだ、彼に逢つてみて呉れんかと云う。それもよからうとホカホカと暖かい春の日さしを浴びながら漸く尋ね

さて、これは思はず筆が走つて明治の末期から大正を通り過ぎ、昭和時代へと半世紀を一足飛びに越してしまつた。そこで又元の明治時代へ逆戻りするとして、先づ満留(みつどめ)先生が鳳鳴会支部の看板を許されたからには、他流の師匠と共同の絃友会を続ける訳にもゆかず、当然絃友会の方は兎島絃風氏個人に任せる事になつた。

一方琵琶界の形勢はますます盛況を呈し、前の四元兄弟を始めとして、木佐貫南濤、永田一二、伊集院鶴城等々一流名手が続々と九州より上京されて各所に教授所が現われ、東京だけでも芝、神田を始め麻布、本郷方面の貸席や寺院の広間などで盛んに弾奏会が催され、今日の歌謡ブームに以て時代が到来しては、彼絃風氏も手を拱ぬいて見てもおられず、家業の洋物店をよそに、絃友会を提げて頻りに演奏会を催すようになった。しかし絃友会の会員だけでは内容が不充分とあつて、他流ではあるが従前のよしみもあり、私が応援出演を承ることになつていった。

会場はいつも九段坂下の右側に、今日で云う所のマーケットがあり、その二階の二百人程が座れる畳敷の貸席であつた。

時は丁度九段の靖国神社が桜で賑う頃の演

我が道を行く六十五年(七)



西郷 天風

さて、これは思はず筆が走つて明治の末期から大正を通り過ぎ、昭和時代へと半世紀を一足飛びに越してしまつた。そこで又元の明治時代へ逆戻りするとして、先づ満留(みつどめ)先生が鳳鳴会支部の看板を許されたからには、他流の師匠と共同の絃友会を続ける訳にもゆかず、当然絃友会の方は兎島絃風氏個人に任せる事になつた。

一方琵琶界の形勢はますます盛況を呈し、前の四元兄弟を始めとして、木佐貫南濤、永田一二、伊集院鶴城等々一流名手が続々と九州より上京されて各所に教授所が現われ、東京だけでも芝、神田を始め麻布、本郷方面の貸席や寺院の広間などで盛んに弾奏会が催され、今日の歌謡ブームに以て時代が到来しては、彼絃風氏も手を拱ぬいて見てもおられず、家業の洋物店をよそに、絃友会を提げて頻りに演奏会を催すようになった。しかし絃友会の会員だけでは内容が不充分とあつて、他流ではあるが従前のよしみもあり、私が応援出演を承ることになつていった。

会場はいつも九段坂下の右側に、今日で云う所のマーケットがあり、その二階の二百人程が座れる畳敷の貸席であつた。

時は丁度九段の靖国神社が桜で賑う頃の演

さて、これは思はず筆が走つて明治の末期から大正を通り過ぎ、昭和時代へと半世紀を一足飛びに越してしまつた。そこで又元の明治時代へ逆戻りするとして、先づ満留(みつどめ)先生が鳳鳴会支部の看板を許されたからには、他流の師匠と共同の絃友会を続ける訳にもゆかず、当然絃友会の方は兎島絃風氏個人に任せる事になつた。

一方琵琶界の形勢はますます盛況を呈し、前の四元兄弟を始めとして、木佐貫南濤、永田一二、伊集院鶴城等々一流名手が続々と九州より上京されて各所に教授所が現われ、東京だけでも芝、神田を始め麻布、本郷方面の貸席や寺院の広間などで盛んに弾奏会が催され、今日の歌謡ブームに以て時代が到来しては、彼絃風氏も手を拱ぬいて見てもおられず、家業の洋物店をよそに、絃友会を提げて頻りに演奏会を催すようになった。しかし絃友会の会員だけでは内容が不充分とあつて、他流ではあるが従前のよしみもあり、私が応援出演を承ることになつていった。

会場はいつも九段坂下の右側に、今日で云う所のマーケットがあり、その二階の二百人程が座れる畳敷の貸席であつた。

時は丁度九段の靖国神社が桜で賑う頃の演

薩摩琵琶の真髓と今昔観(七)



宮本武蔵とはどんな人間かー 勝負のためには手段を選ばず、日本人の心情に反する異端剣客ー 北斎との対比

東京 坂本 錦道

宮本武蔵を題材とした巖流島の決斗が最近琵琶界にも相当広く謡われている。この武蔵に就て昨年九月号京絃に白石庸之助先生の執筆で、その寸評が出ていた。

「武蔵は権謀術策に優れ、その獨介の性質のため世に容れられず、一国一城の主の夢を剣に托して志を得ず、一生を不遇のうち

に終つた」云々。とある。誠に武蔵を評するに正鵠を得た言である。

武蔵の伝記に就ては古くより武芸小伝、甲州軍鑑等幾十冊もあり、大正期よりは常陸丸

や彰義隊の作詞者として有名な池辺義象氏あり、下川潮氏、高野佐三郎氏等の文献など汗牛充棟も知らぬものがある。私も往年若き学剣の徒として傾倒していた。

推うに之は表面武蔵の豪剣にあこがれを抱くだけのもので、武蔵を人間として深く見る目のなかつた事を今にして思うのである。昭和以後武蔵に関する所謂剣豪小説が世のブームを呼んだが、一方に於ては人間武蔵を深く掘り下げて追求する一連の史家が続々と登場して来た。

万里一空、孤剣をもって冷徹無情の境地に立った武蔵は、剣の天才として或は学ぶべき点もあるが、然し武蔵と雖も所詮は人間である以上、彼の剣歴を見て無条件に傾倒は出来ない。その評価は人によって違ふにしても、元来勝負というものは正々堂々と戦うべきものである。彼の勝負の駆引きは全く日本人の心情に相反する事ばかりである。北条早雲の武士の恥辱とする二十一ヶ条の中に「假令兵略のためであっても危計を用いて人を出し抜く事」を強くいませしめてゐる。

武蔵自著の五輪の書には、彼十三才にして播州の新当流の有馬喜兵衛と勝負をして打勝つてゐる事が記されているが、彼の年令を今様に数えたと十一才の幼童である。当時一流の剣客であつた喜兵衛が、この年端もゆかぬ幼童に勝負を仕掛けられ、果して正気で受けて起つほど分別のない剣客であつたか。仮りに武蔵がオギャーと生れた時に剣を握つて来

たとしても高々十年のキャリアである。こんな眉唾ものが真に受け取れるか、大方の判断に任せる。

更に自叙伝は続く。「我五十年の頃より以來は、尋ね入るべき道なくして光陰を送る。中略」仏法儒道、軍記軍法を用いず云々」とある。これはまことに諸仏諸天を無視した不敬極まる放言である。およそ古今より芸道の探求というものは、行けども行けども遙く際限のないものである。死ぬ迄の厳しい試練の上に立つ事が芸道修業者に課せられた命題であると同時に、如何なる天才と雖も人間である以上はこのプロセスを経ねばならない。武蔵が心技体の研究が五十才にして総てを終り、最早や尋ね入るべき道がないという放言は、どう考へても狂つてゐる事がはっきり判る。然しこの時機に於て、当時の武芸者や世の中から総スカンを喰つて、自序は見ようによつては絶望的ややくその言辭と見ることも出来る。

さて、この武蔵と対比する例証として、文化二年(一八〇五)日本画壇の巨匠葛飾北斎がある。谷文兆と共に十一代將軍家斉の前で席画を披露した高名の画匠である。これ程の名人が晩年死期の迫る時「私はあと五年でいい、生きられたら本當の絵かきになつて見せる」と云つて死んだ。この二人の巨匠と較べて見て、北斎の芸道に対するその謙虚な執念は誠に範とすべきで、片や武蔵の放言は自信過剰とその慢心ぶりは鼻持ちならぬものである。

武蔵の試合はどこか武道本来の正当性に欠けている。勝負のためには手段を選ばない。小次郎との対決も陋劣な術策と陥穽さを用いた、吉岡一門との試合も、吉岡方の武誌によれば必ずしも武蔵は勝つてはいないと史家は証言している。

六十数回の武蔵の勝負の相手は一体どんな武芸者であつたか。これも史家の言によれば大藩の手剛い相手は極力避けて、ドサ廻りの名もない武芸者相手だから余り自慢する程の事もない。当時の世相は下剋上の乱れた世とは云え、兵法を志す武芸者は武道の作法ぐらひは知つていたものと思う。そうした真面目な武芸者に、彼一流の老獪な術策によつて勝ちを占めた武蔵の如き、武士道の風上にもおけぬ者と云えよう。

武蔵の全国遍歴は、その目的は剣の修業もさる事ながら仕官であつた。それは単に兵法指南などどちつぽけなものではない。藩の枢機に参画して、あわよくば一国一城の主の夢を持つていた。尾張藩や黒田藩等に於ても、共に武蔵の異様な風態、グロテクスな人相や眼光を持つてゐる者は適当でないと態よく断られてゐる。もうこの頃の武蔵は寄る年よみ六十に手の届く頃で、最後に熊本藩の細川忠利の下に客分三百石の捨扶持を貰つてやつと安住の地を得、茲で五輪の書や三十五箇条を著したが、病と共に心身の疲れを如何ともする事も出来ず、死後の事を托した自戒の書独行道を遺し、これを辞世の心として六十二才、正保二年五月十九日熊本千葉城の宅に、孤影悄然とその一生の幕を閉じた。

新作 月形半平太



小塩梁水作詞作曲

尊王攘夷の風吹く 京の都のこゝかしこ
朝に夕べに剣なる 国家有為の益良雄が
逝きて悲しや魂魄が 国の御楯となるならん
茲に長藩月形半平太 刀匠一文字国重が
恨み重なる武士の 血をぞすえ
斬れよくと鍛えたる魂籠る刀をば
購い求めし折も折 武士の掟是非もなく
旗本奥平を斬り捨てし胸の傷手をいやさんと
兼ねて馴染の料亭に 今宵も通う半平太
糸を思はず春雨の 京の巷に降り注ぐ
嗜む酒に蕩然と 眠け催しうとくと
辿る夢路や今いづこ 傍えにはんべる染八は
亡き殿奥平が思い者 折あらば仇を報せんと
機会わらひし甲斐ありて 待つ時久し今宵の首尾
隠し持ちたる短刀で 月形目がけ刺さんとす
体をかかわせる半平太 染八の利腕ハッシと打ち
国にあづけしこの身体王政復古のそれまでは
そなたの自由にならぬ身と 語れば染八うなづきつ
今は何をか申すまじ この後は心入れ替えて
必ず御為になる所存 さらばと許り月形は
入り来れる梅松を 引従えて玄関口
かざせる傘に手をとりて 春雨じゃ濡れて行こう
只一言を残しつゝ 四条河原に歩み行く
鴨の流れも暗闇に かくれて暗し橋袂

舞 見 御 暑 残

邦楽 鶴鳴会 主宰
社団法人東洋音楽学会々員

史 城

普 門 義 則

教室 東京都葛飾区堀切二ノ 六〇ノ三

〒124 清和荘 二階一五号
電話〇三二六九四一

自宅 横須賀市富士見町三ノ 一七ノ二七
〒238 電話〇四六八一二二一

三七七五

北 中 旭 蝶

〒671-02 姫路市花田町高木一八ノ四
電話 姫路(二三三) 七一九五番

旭 穂 会

〒602 京都市上京区東堀川 丸太町上ル角
中島旭穂方 電話〇七五(二一一) 四〇三三番

歩みを運ぶ月形の 背後を襲う新撰組
 闇に閃く必殺陣 月形目掛けて斬りかゝる
 腕は河原に横たわる 無二無三に斬り結び
 骸は手に立つ者もなし 泰然自若月形は
 かねて嗜む鉢の木を 口吟みつゝ悠々と
 闇の彼方に歩み去る 年草まり時うつり
 討幕の詔勅俄かに下る 喜こび勇む勤皇浪士
 病に伏せし友の早瀬 詔勅下りしその由を
 語れば喜ぶ早瀬をば 病の身なり自重せよ
 我は今宵松ヶ崎 大乘院にての会合に
 出席なして来る程に 折角養生せられよと
 新撰組のその翼に 落つるも知らぬ半平太
 友をいたわり別れ行く

風雨々矣易水寒

壯士一度征不還

静まり返る大乘院 待つ間程なく茶坊主が
 運びし茶にうるほいつ四辺つくく見廻すに
 忍び寄る剣気、殺気 こわいぶかしと油断なく
 用意おさく、怠りなしサツと一閃繰り出だす
 手練の早業 槍の穂先を払いのけ
 突差に立ちて叫ぶより我は月形半平太なり
 闇討ちとは卑怯千万 と名乗りつゝ
 斬れば天晴腕の冴え 謀られしかと無双剣
 唐竹割に斬り倒す 敵は衆を頼みつゝ
 前後左右を取り囲み 縦横無尽に斬りかゝる
 これより先に早瀬主税月形大乘院に行きつるは
 新撰組の畏と知り 月形半平太救わんと
 病める軀に鞭打ちつ 大乘院に馳せつけぬ
 如何に剣の達人も 入り替り立ち替り攻め立てられ
 最早これ迄と 柱に寄りて僅かにも

一息入るゝ一刹那 電撃の如く繰出せし
 槍は無念や月形の 腹をグサツと突刺しぬ
 傷手に思はず槍引き寄せ物の見事に斬り倒す
 転びつゝまひつ同志らと 馳せ参じたる早瀬主税
 勢を新たに追ひ散らし月形々々と呼ばわれれば
 息をきつゝ主税を見上げ詔勅胸につつと立ち
 流るゝ血潮手に受けて柱に向いさらりと
 死護国鬼と書き残し 跡を頼むと益良雄の
 忠魂天に飛び散りて 最期を效にとめけり

水藤先生は生きています!!

(錦襖師百ヶ日の法要から)

早乙女 千秋

迎え火の想い出悲し 寿松院一
 名人水藤錦襖先生が亡くなられて、早くも
 百余日——まこと、歳月の流れの早きこと、
 ただ驚くばかりである。
 水藤さんの、新盆の月でもある去る七月二
 十四日。上野の精養軒に於て先生の叙勲祝を
 兼ねての百ヶ日法要がしめやかに催されたが、
 その折の感想など少し記してみたいと思う。
 私が精養軒の会場に着いたのは、暑い夏の
 陽が未だ落ちやらぬ八ツ下りだったが、既に
 水藤一門の村木桜柳先生を始め新部桜水さん、
 西村錦風師、藤波桜華さんらが、はやばやと
 姿を見せていた。とりわけ西村師は、この日
 の世話役? とて会場づくり何かと忙がし
 く立ち廻っておられたようである。

舞 見 御 暑 残

錦心流一水会多摩支部長
武絃会事務所

伊藤 馨 水

〒184 東京都小金井市本町一丁目
八ノ五
電話〇四二三(八一)
三三四四番

井上 兼子

〒612 京都市伏見区深草瓦町六
電話〇七五(八四一)
四八二〇番

植村 稟 水

「京絃」主幹

人とは出ないであろうその名人芸は、私共琵琶愛好者の一人々の胸の中に永遠に生きて
 いるのである。私はそれを信じて疑わぬ。
 名人、水藤錦襖先生は今もなお生きて居ら
 れるのである。(八月三日夜)

四明会・正絃会共催



泊弾交會

会場に隣接せる広い控え室の中央に、ひと
 きわ高い祭壇には、黄菊で美しく飾り浄めら
 れた、いまは亡き水藤先生のご遺影がまっ先
 きに眼の中に飛込んで来た想いで、一瞬ぐっ
 と胸が詰った。
 「トメさん、ご苦労さま……」久方ぶりでお
 会いした村木さんが、遺影の方をチラッと眺
 め乍ら、「あたしはね、こゝへ着いて先生の
 あのお姿を見た途端、胸がもう一杯になって
 ……」と、早くも涙声で一心なしか、その瞳が
 うるんでいる。それもその筈、村木さんは
 この日、会半ばに恩師の遺影の前で、宗家の
 お家芸とも云うべき「曲垣」を演奏されるこ
 とになっているので、その胸中……心情こそ、
 さこそと想いやられようと云うものである。
 村木さんと話し乍ら一息入れている間に、
 仲川秀邦先生を始め芸の友の鈴木氏、山田洲
 鳳さん、浅野晴風先生、藤巻旭鴻師、押田旭
 窃先生、滝原流石氏、宮武旭豊さんなど、日
 頃お馴染みのあの顔、この顔……と、りくぞくと
 参会者が詰めかけて。

定刻の五時すぎ喪主の水藤五郎氏、水藤枝
 水先生などご遺族が居並び、しめやかな読経
 のうちに故先生への献花の儀が、参会者達一
 人々の手によって行われ、ひとしをと多く
 の人々の涙を誘う想いであった。
 そして、さし暑い夏の陽が落ちて、あ
 たりが涼やかな夕闇に包まれる頃、藤巻旭鴻
 師司会の下に、正絃会の辻靖剛先生と加藤錦
 陽師より、それぞれ故人の此の度の叙勲に就

ての秘められた苦心談の一コマが披露され、
 続いて浅野晴風、鈴木鉦次郎、滝原流石諸氏
 らの、名人錦襖先生の芸に就て、或いはその
 人柄に関して色々と称讃の言葉が贈られ、そ
 の間、喪主五郎氏が心尽しのビール、ジュエ
 ス、幾多の佳肴を頂き乍ら、話は等しく故人
 の在りし日の想い出に花が咲いて、相会する
 者百余人の多きに達する盛会であった。
 が、会半ばにして、亡き水藤師の「盛綱先
 陣」のテープが流れ、また村木桜柳さんの演
 奏による「曲垣平九郎」の、ハッと答えて平
 九郎、連銭芦毛の駒にガツキと打ち跨がり、
 と、その一節を耳にした途端、日頃は呑んべ
 エの私も、思わすグッと胸中が熱くなり、
 場所がらをも弁えず声を殺して男泣きの態た
 らくで、何とも辛いことだった。
 気がついてみると私ばかりではない、広い
 会場のあちこちから、故人の縁者か、或いは
 お弟子さん達でもあろうか、つゝましく声を
 押殺してのすゝり泣きかひとしきり続いて、
 今更の如く亡き人の急逝が惜しまれてならぬ。
 然し、そうした人々の深い哀しみもほんの
 一瞬で、あれは誰であったか? たしか「邦
 楽の友」社の尾形女史であったと思うが「水
 藤先生は、今もなお……私は生きて居られる
 と思っています……。」と、簡単な挨拶のうち
 にも、名人は死せず」と語ったその一言で、
 文字通りホッと救われた想いをした。
 確かにその通りである。そのお姿は濁った
 この世から消えても、その御霊と、もはや二

薩摩琵琶の東西二大団体である正絃会・四
 明会の会員とその家族、地元の琵琶人等五十
 七名は七月二十九・三十の両日、愛知県豊川
 市の三明寺および妙厳寺に於て一泊弾交會を
 催した。本年は関東関西の中心地で開催する
 ことにし、このお世話万端は浜松の小野鶴彦
 師とその門下の方々にして頂くことになった。
 しかも会場の三明寺は御本尊が音楽の司并財
 天であり、宿泊所の妙厳寺は余りにも有名な
 豊川稻荷さんである。
 二十九日十一時十分豊橋駅に、東西より落
 合った正絃会、四明会の絃友らは、お出迎え
 の小野師門下の大石晃月、青島晃苑両女史を
 交えて久瀧の挨拶を交し、お互いの健康を祝
 し合いながら十一時四十分発飯田線の列車で
 十五分後に豊川駅に下車、小野師門下の佐野
 氏外お一人の自家用車のピストン運転で三明
 寺に送って頂く。既に小野師や門下の方々に
 よって舞台が造られてあり、昼食後直ちに演